

環境整備委員会から神戸新聞社へ当マンションが取り組んでいる状況を情報提供し取材を受けた内容が新聞に掲載されました。

ファミリーの挑戦 (上・中・下)

2015年(平成27年)1月1日 木曜日

神戸新聞

(第3種郵便物認可)

このまちで生きていく

大規模マンション ファミリーの挑戦

ふるさと

「新年もがんばってやろうぜえ」。自治会役員らが料理を一品ずつ持ち寄って開いた忘年会で、会長の後藤和弘(82)が高らかに乾杯の発声をした。

1989年に入居が始まり、約600世帯1600人が暮らす明石市内最大級の分譲マンション「ファミリーハイツ明石」(川崎町2)。忘年会は秋祭りの反省会を兼ねて開いた。

ファミリーの秋祭りは本格的だ。分譲2年後には手作り「みこし」を制作、物足りなくなってきた大型の「基も盛り上げた。30〜50人でかつく自治会役員は氏神の林神社(宮の上)に参入し、もみす。女性用みこしもある。「天高く東に横の明石城」(西に広がる瀬戸内海)。全員で高く絶叫する際の節回しもオリジナルだ。

参加者に振る舞う料理も手作りした。世襲の小林以久恵(88)は、「一人暮らしの女性や子どもがいない主婦などを積極的に誘うようしている。

イベント通じ深めた絆

「食べ物を作るのも楽しいけど、友達を作るのも楽しいです」。

後藤は技術職の会社員を長く



「あけましておめでとう」の文字が光る電飾を掲げるファミリーハイツ明石の住民(川崎町2)

神戸・淡路大震災から10年
10月31日
5時45分、淡路島北部を震源に発生した、M7.3。当時の明石には地震対策の備蓄が少なく、その後の調査で最大震度6以上の揺れがあったと推定された。

勤め、入居2年目の晩年から延べ18年間、自治会長を務めている。「分譲当初はみんな若くて活発だった」といい、近隣の既存自治会に刺激されながら読書会や文化祭、クリスマスツリー掲揚など、毎年イベントを増やしてきた。

根拠にあるのは、子どもたちがにすてきな思い出を持ってほしい、思いつくだけでもいい、という思い。そして、住民同士の絆を深めたいという願いだ。

95年の阪神・淡路大震災。ファミリーは水道やガスが数日止まり、多くの家で食糧が断絶した。目立った被害はなかったが、今後30年以内にマグニチュード(M)8〜9クラスの地震が発生する確率は約70%とされる。阪神・淡路大震災でなく、4年前には東日本大震災も目の当たりにしており、自治会での

備えが欠かせない。

一斉、自治会役員約50人に行った昨年のアンケートでは「震災を知りたかった」という肯定的な意見とともに「行事が多すぎ」「会社員には負担が大きい」という否定的な意見も寄せられた。

後藤はこれらを重く受け止めて、住民同士が顔の見える関係を築き、保ち続けることが不可欠だとの信念を強く、イベントは減らしつつ、省力化させて活動を続ける方法を模索中だ。

（取材後藤和弘）



忘年会で秋祭りの掛け旗を掲げる住民(川崎町2)

大規模マンション

ファミールの挑戦

中



トイレ用水を運ぶため倉庫に備蓄している空のペットボトル

明石市川崎町2の大規模マンション「ファミールハイム明石」(約600世帯、1600人)の地下倉庫には、空っぽの2リットル入りペットボトルが1万本保管されている。大地震の際、消防用水をポンプでくみ上げて注ぎ、自宅に持ち帰ってトイレ用水として使う。ポンプはもう1基あり、水道用水の受水槽から飲料水をくみ出すことができる。

1989年に分譲が始まったファミールでは、現在の住民の半数が7割弱がこのマンションで阪神・淡路大震災を経験した。2014年に行った住民向けのアンケートで、当時水の確保に困ったという回答が多かつ

共助

非常時への備え着々と

たことから、消防団、管理組合、環境整備委員会などの住民組織が対応を検討。住民からペットボトルの提供を受けるなどして態勢を整えた。

管理組合理事長の一瀬充弘(67)は「住民が安心して生活できる環境を整え、歴史がたつても価値が下がらない『ピンチ・ジマニション』を目指したい」と言う。

同組合などは14年、地震などの被害があった場合、各戸の玄関先に住人の被害の有無や避難先などを書き込めるボードを全戸配布した。今後は非常用水を確保するための井戸を掘ったり、炊き出しができるベンチ型のかまどを設置したりする計画だ。

一方、停電などでエレベーターが停止した場合に最高で20階まである自宅にトイレ用水を運ぶことの現実性に疑問を持つ声もあり、「一瀬は水が入ったペットボトルをあらかじめ上階の共有スペースに置いておくなど、検討課題は残っている」と話す。

ファミールにはグラウンドゴルフやお年寄り向けサロンなどの集まりが多い。一瀬は「お年寄りには、他人に迷惑を掛けてはいけないという考えから自由になつてほしい」と考えている。そして「互いに迷惑を掛け合える雰囲気のマニションにしたい」とも。

(敬称略)
(井原尚基)



防災訓練で水をくみ出す方法を実演する住民ら。いずれも川崎町2

阪神・淡路大震災 データ

震災で亡くなった人は全体で6434人に上り、兵庫県内で亡くなった人が6402人を占める。明石市では11人が亡くなり、市外で亡くなった同市の住民も15人いる。市内では139人が重傷を、1745人が軽傷を負った。

A Happy
New Year



クリスマス会を盛り上げる小川さん(左端)

大規模マンション

ファミールの挑戦

下

災害弱者

昨年12月のある日、明石市川崎町2の大規模マンション「ファミールハイツ明石」(約600世帯、1600人)の集会所に住人の独居高齢者ら約20人が招かれ、在宅介護支援センター職員による介護保険制度の説明会が開かれた。自治会長の後藤和弘(82)は「まだ早いと思っ

高齢者守る安全網築け

上の高齢化率は現在約20%。じわじわと高齢化が進んでいる。その対策の一つが、独居高齢者らが体調不良を感じた際、専用ボタンを押せば自動的に知人に連絡が届く市の「緊急通報システム」の活用だ。登録するには知人3人の協力を得る必要があるが、合鍵を持たされるなど、引き受け手にも一定の責任が生じる。

身寄りがない人には依頼するハードルが高いため、ファミールでは、3人のうち1人を管理人が引き受け、セキュリティ完備のボックスで合鍵を預かるシステムの運用が今月中にも始まる予定だ。

阪神・淡路大震災データ

明石市内では2941棟4239世帯が全壊、6673棟10957世帯が半壊するなど30984棟50814世帯に被害があった。震災当日は建物火災が6件発生し、共同住宅や倉庫など6棟の一部計96平方メートルを焼いた。

ファミールの住民有志が月に1回、高齢者向けに開く「ふれあいサロン」。昨年12月にはクリスマス会があり、ビンゴゲームなどを楽しんだ。サロンは小川以久恵(65)が2013年に開設。これまで親族7人の介護と

「自治会にも管理組合にもできないきめ細やかな関わり方をしよう」との思いが行動を後押ししてきた。さりげない会話を通じ、悩みや健康状態をつかみ、SOSを感じ取る。

「自分のことを見てくれてい



手話を使った歌を奏しむ住民。いずれも川崎町2

(井原尚喜)